

はしがき

本書は、異文化コミュニケーション研究への実践的入門書である。現在の日本は多くの外国籍の人々が住む多文化社会になっており、また旅行や留学、ビジネスなどさまざまな理由で海外に赴くことも珍しいことではなくなっている。つまり、私たちにとって文化的背景の異なった人々と接触し交流することは日常の一風景となりつつあり、異文化コミュニケーションはけっして一部の人のみに起こる珍しい出来事ではなくなっている。しかしながら、この日常的で平和な風景の中には、実はさまざまな誤解、軋轢、すれ違いの種が潜んでおり、そのなかで人知れず傷つき、怒り、悲しんでいる人々が数多く存在していることを忘れてはならない。

また、異文化コミュニケーションといえば、外国人との交流だけを意味すると考えている人が多いようだ。しかし、実際はそれだけが異文化コミュニケーションとはいえない。例えば、日本人同士でも、上司と部下や教師と生徒、親と子のように地位や役割の違いによって、相手がまるで別世界に住んでいる人のように感じることもあるだろう。また、異性の友人や知人、職場の同僚などに対して何気なく発した自分の言葉が予想だにしない受け取られ方をして驚いたという経験をした人も多いのではないだろうか。このように、世代、役割、性別など個人の背景の違いによっても、まさに「小さな異文化コミュニケーション」といえるような文化摩擦が生じている。したがって、本書では、国籍をはじめ、民族、地域、言語、宗教、世代、立場、職業、ジェンダーなど、何らかの属性で差異がある人々の間で起きているコミュニケーションを

すべて異文化コミュニケーションとみなし、取り扱うこととする。

本書を貫く基本テーマは「他者との出会いを捉えなおす」である。「他者」とは、すなわち何らかの違いをもった「異文化」の人であり、その人とのコミュニケーションは「異文化コミュニケーション」である。このように捉えなおして初めて、「他者」との接触・やりとりにおいては、誤解や摩擦が起こることは元来避けられず、問題はそれらにいかに対処するかにあるというように考え方を改めることができるかと著者たちは考えている。

本書のねらいは、さまざまな誤解、すれ違いの事例の原因を读者1人ひとりに多様な角度から掘り下げ、考えてもらうことにある。1つひとつのケースをあたかも自身に起こった問題であるかのように捉え、分析し、自分なりの解釈を出し、それを他者に伝えるという過程を経ることで、自己の価値観や考え方の癖に気づくことができよう。また、その気づきをもとに、よりよい異文化コミュニケーターに少しでも近づくことができるようにと願いつつ執筆した。本書が、大学、大学院、そのほか多文化共生社会で生きようとする人々による地域での勉強会、ワークショップ等で活用されれば光栄である。

なお、執筆分担については、印のない箇所は久米が担当し、長谷川が担当したケースやコラムには文末に [H] と記した。また、課題については、共同で作成した。

著者紹介

久米 昭元 (くめ てるゆき)

現職 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科教授

主著 Contrastive Prototypes of Communication Styles in Decision-Making: Mawashi Style vs. Tooshi Style. Michael B. Hinner ed. *The Influence of Culture in the World of Business*. Frankfurt am Main, Peter Lang, 2006 / 『異文化コミュニケーション研究法』(共編著)有斐閣, 2005年 / 『異文化コミュニケーションの理論』(共編著)有斐閣, 2001年 / 「決め方の文化摩擦」『異文化コミュニケーション研究』第5号, 1993年 / 『感性のコミュニケーション』(共著)大修館書店, 1992年

長谷川典子 (はせがわ のりこ)

現職 北星学園大学文学部英文学科教授

主著 A Quantitative Analysis of Japanese Images of Korea. *INTERCULTURAL COMMUNICATION STUDIES*, Vol. XV: 1, 2006 / 「韓国製テレビドラマ視聴による態度変容の研究」『異文化間教育』第25号, 2007年 / 「テレビドラマ『冬のソナタ』の受容研究」『多文化関係学』第2号, 2005年 / 「対韓イメージの質的研究II」『異文化コミュニケーション』第10号, 2007年 / 「メッセージを読み解く——内容分析の方法」『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣, 2005年

本書の使い方

本書の特徴

本書の特徴は、現在急速に進行中であるグローバル化社会にいる私たちのまわりで起こっているケース（事例）を紹介し、それぞれを多角的に考察できるように工夫を凝らしているところにある。例えば、ケース紹介の後には「課題」があるが、これは、クラス、あるいは学習サークルなどの場で取り上げることを想定して用意されている。課題においては、参加者同士で話し合い、発表をするといったように、能動的な学習を促すことをねらいとした。また、他者とは異文化であり、他者との意見交換から学ぶことそれ自体が異文化コミュニケーションの実践であるという本書を貫く考えをもとにこれらの課題が書かれているため、読者には、できる限り、ケースについて他の人々の意見を聞き、そこから多くを学んでほしい。

全体の構成

本書は全体が5つの部分に分けられている。まず序章「現代社会と異文化コミュニケーション」で、私たちを取り巻く現代社会を概観し、本書の背景となる文化、コミュニケーション、異文化コミュニケーションの概念を整理し、第I部以降への導入とする。第I部では、日本国内で起きる誤解や摩擦として、日本に滞在している外国人や海外から帰国した日本人が経験する摩擦、さらには日本人同士で起きるすれ違いや摩擦について紹介する。続く第II部では、海外で起きる誤解や摩擦として海外留学、海外赴任、海外旅行の場におけるケースを取り扱う。第III部では、国の内外で起きているさまざまな交流の諸相を、国際交渉、国際協力、およびメディア報道に大別して取り上げる。最後に、終章では、それまでの学びのまとめとして異文化摩擦の要因を概説した。なお、各章の構成と使い方は次の通りである。

各章の構成と使い方

【概説】

第1章から第9章までは、各章で取り上げるテーマについて、それを取り巻く経緯、現状、問題点などを2～3項目に分けて簡潔に紹介した。

【ケース】

本書で取り上げるケース（事例）のもとになったストーリーは、その大部分が1980年代から2006年までに著者らが直接経験したか、見聞きしたこと、国内外での調査、および日本のテレビ、新聞等のメディアで報じられたもの、関連図書から援用したものなどに基づいている。そのほかに、これまで長年にわたって担当してきた「異文化コミュニケーション論」の授業やゼミ、研究会、講演会などで接してきた大学生、大学院生、社会人から聞いた実体験なども含まれている。

個々のケースは起こった時と場所、経緯、関与した人物とその背景などが複雑に絡まっているが、ここでは、当事者の視点を中心にして、起こった事柄の要点のみをごく簡潔に紹介している。ケースはできるだけ今後もグローバル化社会で生きる読者に考えてもらいたい問題や、今後読者が見聞き、または直接経験する可能性の高いものを選んだ。なお、ケースに登場する名前は一般によく知られている人物以外は、仮名である。ほとんどが実際に起きたことに基づいてはいるが、それぞれのストーリーには本書の目的に照らしてそれなりの脚色がなされていることを断っておきたい。

【設問】

各ケースを読み終えた読者にさまざまな解釈・考察を促すきっかけとしてもらうために、1つの「設問」を用意した。ケースを読み終えた瞬間に、摩擦やすれ違いが生じた原因がどこにあり、どこですれ違っていたのかといった解釈ができる場合も、できない場合もあるだろうが、少なくともこれだけは考えてほしいという問題の一例としてそれぞれの設問を用意した。もちろん、同じケースから、別の設問を考えてみることも十分可能であるので、読者自身もぜひ試みてほしい。

【考察】

「設問」に対する著者の解釈として1つの「考察」を試みた。しかし、人間のコミュニケーション行動において絶対的に正しい解釈といったものはない。著者自身の経験もものの見方もごく限られたものであり、ここでの考察はあくまで多種多様な解釈の一例にすぎず、批判的な目で捉えなおすこともおおいに歓迎したい。また、著者の解釈を読む前に、読者はしっかり自分の頭で考え、答えを出し、できる限り他の参加者との意見交換を試みてほしい。そういった考察や解釈の繰り返しを通して初めて、自身のものの見方の偏りに気づくことができるからである。

【課題】

「考察」の後に、紹介したケースに関連して、グループ作業などを通じてさらに学習を深める目的で用意したものが「課題」である。例えば、特定のテーマで賛否両論に分かれて行う「ミニ・ディベート」、あるいは、「こんなときどうする?」といったクイズ風の課題に対する意見交換など、参加者が能動的に学べるように工夫した。さらには、「ロールプレイ」「調べてみよう」などといった形で、読者が自主的に学習を進めることができるよう、さまざまな課題も用意した。

【コラム】

第I部から第III部までの各章に、関連する内容の専門用語や豆知識、理論の紹介などを行う囲み記事(コラム)を必要に応じて設けた。

【参考文献】

巻末に、異文化コミュニケーション、文化摩擦を中心とした参考文献を付けた。

【索引】

巻末に、本書に出てきた異文化コミュニケーション研究に必須のキーワードを五十音順にまとめた。

目 次

| | |
|--------|-----|
| はしがき | i |
| 著者紹介 | iii |
| 本書の使い方 | iv |

序 章 現代社会と異文化コミュニケーション I

| | |
|--------------|---|
| 現代に生きる | 1 |
| コミュニケーション | 3 |
| 文化 | 4 |
| 異文化コミュニケーション | 5 |
| 異文化衝突・摩擦 | 7 |

第 I 部

国内で起きる摩擦

第 1 章 日本在住外国人 II

| | |
|-------------------------------------|----|
| 外国人の社会生活 | 12 |
| 外国人の権利 | 12 |
| ケース 1 ユンさんの葛藤 | 14 |
| ケース 2 ベトナム難民ホアさんの死 | 17 |
| 〈コラム〉 海外で事故に巻き込まれたら | 18 |
| 〈コラム〉 偏見やステレオタイプはなぜ起こる？ | 23 |
| ケース 3 もうこりごりホストファミリー | 24 |
| ケース 4 金髪 ALT (外国語指導助手) クリスティーナさんの悩み | 29 |
| 〈コラム〉 みんな一緒の意見？ | 30 |
| 留意点 | 35 |
| 「ガイジン」vs. 「外国人」 | 35 |
| エスニック・ネットワーク | 36 |

第2章 帰国日本人

39

| | |
|-------------------------------|----|
| 帰国児童・生徒の適応 | 40 |
| ケース1 純君のアイデンティティ・クライシス | 41 |
| ケース2 バイリンガル帰国生、緑さんの苦悩 | 45 |
| 〈コラム〉日本人ってどんな人 | 46 |
| ケース3 「帰国オババ？」由香里さんの逆カルチャーショック | 50 |
| 留意点 | 54 |
| 黒か白かの決着 | 54 |
| 〈コラム〉逆カルチャーショックの研究 | 55 |
| 国際ボランティアの帰国後 | 57 |

第3章 共文化コミュニケーション

59

| | |
|----------------------------------|----|
| 世代間ギャップ | 59 |
| ケース1 車椅子での生活になって | 62 |
| ケース2 「セクハラ」社長との戦い | 67 |
| 〈コラム〉中央志向——共通語と方言 | 68 |
| ケース3 紗枝さんの怒り | 73 |
| 〈コラム〉ジェンダーギャップはなぜ起きる？ | 78 |
| ケース4 同性愛者ってどんな人？——美恵子さんの語りから | 79 |
| 留意点 | 84 |
| 小さなカルチャーショック——地域差にみる異文化コミュニケーション | 84 |
| 結婚＝異文化コミュニケーション？ | 86 |

第Ⅱ部

海外で起きる摩擦

第4章 海外留学

91

| | |
|-------------------|----|
| 留学先での異文化不適應 | 91 |
| ケース1 クラスメイトの冷たい視線 | 93 |
| ケース2 寸劇に大抗議デモ | 96 |
| 〈コラム〉サポート・ネットワーク | 97 |

| | |
|--------------------------|-----|
| ケース3 アカデミック・アドバイザーとの面会 | 100 |
| 〈コラム〉 不安・不確実性減少理論 | 101 |
| 留意点 | 106 |
| アメリカ留学生活——「何でもはつきり」の落とし穴 | 106 |
| 友人はどこに？ | 107 |

第5章 海外赴任

109

| | |
|------------------------------|-----|
| 赴任決定後の準備 | 109 |
| 求められる危機管理 | 111 |
| ケース1 解雇したい従業員 | 112 |
| ケース2 駐在員夫人の狼狽 | 114 |
| 〈コラム〉 パーティのお返しは？ | 117 |
| ケース3 実るほど頭を垂れる稲穂かな？ | 117 |
| ケース4 高くついた看板代 | 120 |
| 〈コラム〉 オフィススペース感覚あれこれ | 121 |
| 留意点 | 123 |
| 現地従業員を理解するには | 123 |
| 〈コラム〉 リーダーシップ・スタイルと異文化シナジー効果 | 124 |

第6章 海外旅行

127

| | |
|-----------------------------|-----|
| 旅先での焦燥 | 127 |
| 日本人旅行者に対するイメージ | 128 |
| ケース1 キャビン・アテンダントとの会話 | 130 |
| ケース2 初めての韓国旅行 | 133 |
| 〈コラム〉 ホストとゲストの相互関係としてのツーリズム | 137 |
| ケース3 気づいたら麻薬の密輸入？ | 138 |
| 〈コラム〉 コミュニケーションとしてのチップ | 142 |
| ケース4 生牡蠣で吐き気 | 143 |
| 留意点 | 145 |
| お客様は神様ではない!? | 145 |
| 気後れは禁物 | 146 |
| 安全神話からの脱却 | 147 |

第Ⅲ部
国際舞台で起きる摩擦

第7章 国際交渉 151

| | |
|-----------------------|-----|
| 交渉とは | 151 |
| 戦後の日本外交 | 152 |
| 交渉の準備 | 152 |
| ケース1 湾岸危機時の日米交渉 | 154 |
| 〈コラム〉異文化コミュニケーション能力とは | 159 |
| ケース2 露と消えた名古屋オリンピック | 160 |
| ケース3 捕鯨の再開は不可能? | 165 |
| 〈コラム〉国際ビジネス交渉 | 166 |
| 留意点 | 171 |
| 多国間交渉のハードル | 171 |
| 交渉力 | 172 |

第8章 国際協力 175

| | |
|-------------------------|-----|
| 日本の国際協力 | 176 |
| ケース1 ほしいのはお茶だけ? | 177 |
| ケース2 協力隊員山崎さんの戸惑い | 182 |
| 〈コラム〉女性のエンパワーメントと文化相対主義 | 183 |
| ケース3 デイミュロ審判の帰国 | 189 |
| 〈コラム〉フェイス交渉理論 | 193 |
| ケース4 誰のための歴史資料館? | 194 |
| 留意点 | 198 |
| 持続可能な社会に向けて | 198 |

第9章 マスメディアとパーセプション・ギャップ 201

| | |
|-----------------------------|-----|
| マスメディアの報道 | 201 |
| ケース1 ルワンダの悲劇 | 202 |
| ケース2 拒絶された原爆展 | 208 |
| 〈コラム〉感情移入による偏見・ステレオタイプの通減効果 | 214 |

| | |
|--------------------|-----|
| ケース3 「冬ソナおばさん？」の嘆き | 215 |
| 留意点 | 221 |
| メディア・ウオッチの必要性 | 221 |

終章 異文化摩擦の要因

223

1. 「人みな同じ」の思い込み 224
2. 「間違い探し？」の傾向 224
3. 意味は言葉にあり？ 226
4. 非言語コミュニケーション①——時間感覚 226
5. 非言語コミュニケーション②——空間感覚 228
6. 固定観念を抱く——ステレオタイプ 228
7. 人を見下す——偏見 229
8. これだけは譲れない——価値観 230
9. これだけはしてはいけない——倫理観 232
10. 問題解決への道筋——思考法 233
11. 一番賢いのは私たち？——自文化中心主義 234
12. ちょっと待て！——即断の傾向 235

| | |
|------|-----|
| あとがき | 237 |
| 参考文献 | 239 |
| 索引 | 251 |

イラスト：オカダケイコ

現代社会と 異文化コミュニケーション

現代に生きる

21世紀に入り、日本社会はグローバル化がいつそう進んだ。世界第2位の経済大国で大量消費社会に住む私たちにとっては、世界各地からもたらされた物が街にあふれ、生活面での便利さが大幅に増してきたことは疑う余地がない。科学技術、なかでも通信技術の進歩は著しく、携帯電話やパソコンなどが国民の大多数に浸透し、今や国境を越えて電子メールやインターネットを利用することもすっかり一般的になった。そのためか、日常生活のペースが加速し、人々の受けるストレスも並大抵のものではなくなっているように思えて仕方がない。今でも、農山村や漁村に行けばある程度はゆったりした時の流れを感じることができるのかもしれないが、それでも国全体が限りなく都市化の過程にあるように思える。

都市化現象が急速に進むなかで、人と人との関わり方が以前と比べてずっと希薄になっている。最近のニュースをみていると、幼児虐待や子どもが親を、そして親が子を殺害するなど、これまでの常識では考えられないような悲惨な事件が次々に起きている。社会が病んでいると一言では片づけられないにしても、いろいろな要因が重なって少なくとも一部ではコミュニケーション不全症

の様相を呈していることは明らかである。

地球全体ではどうだろうか。20世紀には米ソを中心とした冷戦が半世紀以上続き、それが一挙に終焉を迎えると、いよいよ平和が訪れるのかと人々が思ったのはほんの一瞬だった。21世紀になると、それまで覆い隠されていたものが一挙に吹き出すようにさまざまな問題が浮上してきた。戦争や地域紛争はいつこうになくなる気配はないし、ニューヨークの貿易センタービルなどを襲った9.11の同時多発テロをはじめ、ロンドン、バリなどで起きたテロ事件も人々の記憶に焼き付いている。イスラエルとパレスチナの間の緊張は依然として続き、自爆テロが頻発し、和平交渉への道にはほど遠い。交渉の重要さはわかっているにせよ、相手に対する不信感があまりにも強いために対話への糸口さえなかなかつかめないのが現状だ。世界全体をみても、交渉よりも、核を開発し、軍事力で押さえ込もうとする動きも最近とみに強くなり、コミュニケーションの役割が低下している。

実際、人類の歴史において今日ほど全世界の人々の相互依存度が高かった時代はない。政治、経済、貿易はいうに及ばず、環境、人口、エネルギー、食糧の諸問題、それに加えて、ビジネス、観光など、何をとっても世界のどこかで起きた出来事が瞬時に私たちの生活に影響を与えているのである。しかしながら、現実には問題を解決に導くよりはその反対に多くの摩擦が生じ、お互いが不必要に憎しみ合って緊張は増す一方である。

このような時代に必要なのは、世界中の人々が協力し地球が直面している共通の課題の解決に向けて努力することである。そのためには、われわれは世界各地の人々と国、組織、個人の違などさまざまな文化的障壁を乗り越えて、実りあるコミュニケーションを行う必要がある。つまり、現代の私たちに突き付けられた

大きな課題の1つは、異質な相手と、満足のいく異文化コミュニケーションを取り結ぶための方策を講じることである。そこで、このような問題を考えるうえでのキーワードであるコミュニケーションと文化について考えたい。

コミュニケーション

私たちが他者と何らかの関わりをもつとき、そこには必ずといってよいほどコミュニケーションが介在する。コミュニケーションとはいったい何だろう。それは自明のことだと思っけていても、いざ説明するとなると意外に難しい。この用語に対して、いろいろな訳語がこれまで試みられてきた。「伝達」「報道」「連絡」「意思疎通」などなど。そのような表現以外にも「伝え合い」とか「話し合い」、あるいは「以心伝心」といった表現がそれにあたるという人もいる。しかし、いずれの表現も「コミュニケーション」という原語がもつ広がりや深さを表現しえておらず、現在のところ、「コミュニケーション」という外来語がそのまま日本社会に定着し、それが広範にかつ恣意的に用いられているといったところであろう。

ここで、本書で使うコミュニケーションを定義しておきたい。コミュニケーションとは「自己と他者の間で行われるメッセージのやりとり」である。メッセージは情報と考えるもいいし、要するに「相手に伝達しようとする内容」である。そこには発信する側がもつ気持ち（情熱や怒り、温かみなど）も十分に入ってくると考えておきたい。それから、やりとりということは相手と自己が相互に関わることであり、この「相互性」というものこそコミュニケーションの特徴的な点である。自己というものを中心におくとき、いかなる他者との関係においてもその基本はコミュニケー

ションにある。他者との絶え間ない無数のコミュニケーションを通してわれわれは生きているのである。しかし、このことは日本では比較的最近まで特別に意識されることがなかったように思われる。このことをもう少し掘り下げるために、コミュニケーションと密接な関係にある文化について考えてみよう。

文 化

文化という言葉から、普段イメージされるものは何であろうか。美術、音楽、伝統芸術、あるいは風俗・習慣などを思い浮かべる人が多いと思われるが、本書では次のように捉えている。文化とは一定の地域の中で長年の間に築き上げられ、人々の頭の中に蓄積された「共通の思考の体系」のことである。ある状況において自分がどのように振る舞えばよいのかについて瞬時に判断するとき基準とするルールのようなものであり、自分の住んでいる地域ではあたり前となっている共通の「考え方の癖」、あるいは「行動の仕方」「ものの見方」といってもよい。

また、別の言い方をすれば、文化は「集団による歴史的共有体験」といってもいいかもしれない。文化は一定の地域や集団の中で共有され、学習によって次の世代に受け継がれていくものである。それはまた、社会生活を円滑に営むための「常識」「暗黙の了解事項」と考えることもできる。人々はそのような了解に向かって考え方を収斂していかなければ共同生活を営みえないのである。したがって、文化は、人々が物事を判断し、行動するための基準となる「司令塔」の役割を果たしている。また、文化は空気のようなものである。あるいは風のようなものといってもよいかもしれない。それはあまりに当然すぎるが故に、日常的に意識することはほとんどないが、その影響力は計りしれない。そしてその

存在に気づくのは、私たちが当然と思う行動を相手がとらなかったとき、つまり、暗黙のルールが破られたときである。そんなとき、私たちはそこに存在する文化に「気づき」、相手の行動の中に1つの「異文化」を垣間見ることができる。

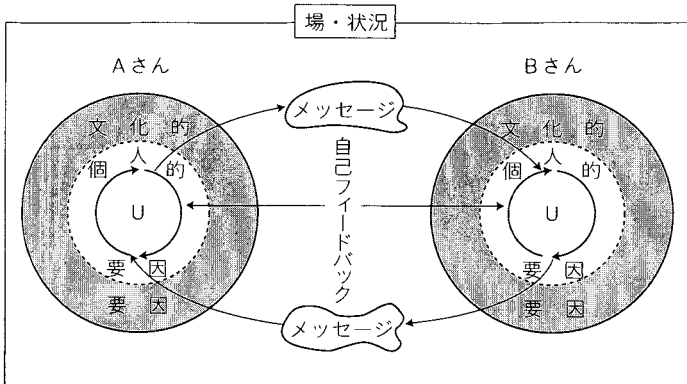
また、文化は成形加工したプラスチック製品のように、ひとたびできあがると固定的でほとんど変化しないようにみえる。しかしながら、長期的にみると、それはかなりの程度変容する。それはちょうど人の顔のようなものかもしれない。人の顔は毎日みているとほとんど変化しないようにみえる。しかし、長い年月を経ると、同じ人でも見違えるほどに変わってしまうことがある。一見矛盾しているようであるが、文化は不変性と可変性をあわせもっているということができるだろう。つまり、世界中のどの地域や民族もそれぞれの地理的、風土的、歴史的な経験に基づいた文化を形成しており、それらを世代から世代へと引き継ぎ、保持している。それと同時に長い年月の間に文化は、異文化との接触、交流、軋轢などを通していつの間にか驚くような変貌を遂げるのである。

異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションとは「文化的背景を異にする存在同士のコミュニケーション」である。これまで述べてきた「コミュニケーション」や「文化」あるいは「異文化」は日本でも外国に行っても目にみえる可視的なものではなく、あくまでも概念である。またそれと同様に「異文化コミュニケーション」もすべて私たちの頭の中で描いている概念であることにくれぐれも留意してほしい（図参照）。

文化を縦軸としてみれば、コミュニケーションは横軸として考

図 異文化コミュニケーションのモデル



(注) 場・状況：コミュニケーションが行われる場・状況，社会文化的な環境，相手との関係性など。

メッセージ：相手に伝えたいことで，言語と非言語のメッセージから成り立つ。相手からのメッセージを受け，解釈し，自己のメッセージを送る。同時に送ったメッセージの「自己フィードバック」を行う。

個人的要因：身体，パーソナリティなど。

文化的要因：言語，エスニシティ，ジェンダー，風俗・習慣，地域，歴史，価値観，信条など。

U：Unconsciousness（自分で意識していない部分）。

えることができる。文化は人間行動の歴史的蓄積であり，それは人々の記憶として蓄積されている。一方，コミュニケーションは歴史を背負った人間が行う他者との「関わり」である。言い換えれば，現代に生きる私たちは文化とコミュニケーションの交差点で生きているということになる。異なった文化に住んでいる世界の各地域の人々がコミュニケーションを通して絶え間なく接触・交流をする「異文化コミュニケーション」の時代に入ったのである。縦軸である各文化ではそれぞれのルールで生活が営まれている。そこに，横軸としてのコミュニケーションが介在する。グロ

ーバル化とは世界的に広がるコミュニケーションを通して人々が新たに文化を作り上げ、共有する過程であり、このようにして異文化コミュニケーションも多彩なプリズムをみせはじめている。

異文化衝突・摩擦

9.11 同時多発テロは異なる思考をもった人々の間で起きた異文化衝突とみることができる。当時、アメリカ国民のほとんどはなぜ自国にこのようなことが起こったのかまったく理解できないようだった。その反対に、テロを企てた人々は、「アメリカのせいで自分たちが貧困になり、虐げられ、自分たちの民族的プライドもすべて打ち壊された。この世の中からアメリカさえなくなれば、素晴らしい世界に戻ることができるが、いかんせんこの強大な国家に対して対抗する手段として残された方法はテロしかない」と考えたのかもしれない。

この事件のように異文化衝突によって失われた命は過去数限りない。人類の歴史は、異質の文明、文化、異国、異民族との戦いの歴史であるともいえよう。命の奪い合いがあたり前となる戦争ほど極端ではなくても、異文化衝突、誤解、対立は不可避である。人間が生きている限り、なくなることはない。科学技術こそ加速度的に進歩した現代社会であるが、異文化接触が日常的に起き、しかも必要ともなっているのに、そのなかに生きる人間は異質の文化的背景をもった存在とどのように向き合っていけばよいかさえ、わからない状態である。ハード面の急速な進展に、人と人、人と社会、人と自然との間の接触・交流方法などのソフト面がまったく追いつけないありさまだ。したがって、これからの社会は異文化接触による衝突や摩擦がさらに増大していくことが目にみえている。とすればまず第一歩として、私たちが、これまでどの